

マニフェスト

私は、1970年5月6日安保の風ひとつそよがぬ無風状態で、銃声がこだまする狙撃の季節を見る。彼等の射程距離内で、全てが権力の正当化の為、着実に幻想を貫徹されつつあるのだ。アスファルトに撒かれた砂粒の様に私達は、その中で最上の幸福を満喫している。日共の如く「トロッキスト」に標的を絞って狙撃のトレーニングをしたり、政府の如く「万博」「赤軍」と一体何処にマトを絞っているのかさっぱりわからぬ狙撃の練習は、より正確な照準器と精密な銃身をつくりだした。ロージャー・コーマンの「ワイルドエンジェル」の警官がアメリカの1960年代感覚で、今日の日本の私達新左翼を見張っている。私達は、いったいどこで狙撃されるかわからぬ不安を持ちながら、暗い喫茶店の洞窟に逃げ込んだり、小さい平和な世界の砦をやたらに強固にしようとしている。

だから、私は、今夜も、にび色不発弾のように一人蒲団の中で被害妄想に泣くのだ。

強圧に耐えようとする意志も6月には、風化されてしまうのだろうか。無限大の距離の中で歩み続け帰還不能の道標なき道標は、私が私を知った17年目に、夢と幻想多き少年時代を見事に裏切られることによって、初めて戸惑いを知った。予定された運命として受け入れねばならぬこの重圧の中で生きる時、私は「テロルの季節」を見る。父と母に、惰性的な歩みを強要され、未来への憧憬を忘却することのみが、権力から回避することだと、教わった時、私は、「テロルの時代」を夢想する。

終りのない刑期の如く戦後に背負った罪の意識は、私を戦後社会へ血の復讐に駆りたてる。

私が、はっきりと権力を見ることができるのは、父と母、否、私なのだろうか。私のテロルは、まずこの敵に銃口を突きつけて始まるのだ。だが、しかし、権力の正体が一体何なのか、やはり見ることができぬ見知らぬ他者なのだ。

今朝も私の父が「ミネラル添加の牛乳」を私の前に差出しながら、西武線の連絡階段を登っていく。出来上がった世界が、彼等を抱擁しているのがたまらないのだ！

有刺鉄線の向こうにバラバラに投げられた私の肉体は、「やあ、お元気ですか。」とでも言いたそうだ。だが、しかし、終日、牛と豚を屠殺した疲れが、私をなぐり倒すのだ。

この静脈のように暗い世界では、スキヤングルとしての破壊像と鄙猥は、私の神棚。螺旋階段を昇る基督者生活は、自分では、高みへ高みへと進んでいる積りでも、この世ならぬ(あの世?)に高く座します神が見下しなされると堂々めぐりしているにしかすぎないもう眩暈は嫌だ！

破滅に追いやる円形議場の華やかさは、私を誘い観衆の注目を一身に集め、鏡舌と戦闘的な対

話をもって、昨日もフィナーレに祝され登場させたのだった。

でもさあ、街角を曲がり、横断歩道を渡り、街はずれまで行こう。真黒になった蒸気機関車が、故郷の雪をかき分け進むのに出逢うだろう。あいつは、口惜しい程、律義だ。恐怖を背負い、支配の歯形をりんごの様に残した25年前も忘れていた。引き込み線の行く先も知らず、只もくもくと煙と蒸気を吐きながら走り続ける。ひたすら内容を知ることできずに……。

御詠歌の声が高まる夕方の5時に、私は、私よ、血でぬるぬるべったりのその銃で、目の前の全てをテロルせよ。破壊こそ、逆転の契機なのだ！

一昨年、4つの都市で同じ拳銃を使った、「4つの殺人事件」があった。昨年、19才の少年が逮捕され、彼は連続射殺魔と呼ばれた。時間と空間のずれなのに……彼が殺人者にならなければならぬ、一体どんな理由があるというのだ。

そう、私は、既に通り魔ではない。回りの全ての者を抹殺する犯罪者なのだ。

